



いつまでも寄り添う心で 被災地支援と中大ボランティア

ボランティアが日本に定着したのは、阪神淡路大震災(1995年)のときといわれる。それまでボランティアは日本ではあまり一般的でなく、志のある人は海外で活動に従事するのがもっぱらだった。

そもそもボランティアとは、利他性、無償性をもって自発的に活動することをさす。その語源はラテン語で「志願する人」を意味するらしい。創造や開拓という先駆の精神も併せもつ。

2万人が犠牲となった東日本大震災では、多くの人ボランティアを志願した。会社員はボランティア休暇を利用し、なかには週末を利用してツアーバスで被災地へ通う社会人の姿もみられ、「ボランティアツーリズム」が萌芽した。

●ボランティアツーリズム

被災地の状況は、刻々、変化を遂げている。

ボランティアの手を借りて瓦礫が片付けられて更地となった海沿いに、生活を営む人の姿はほとんどみられない。海から遠く離れた高台の仮設住宅に、寄り添うように暮らしているのである。復興計画は進んでいるが、仮設を離れるまでに、なお時間を要するだろう。

震災から1年を迎えようというとき、岩手県宮古市を訪ねた。観光復興をテーマにした講演会に登壇するためである。開催に先立ち県北を視察した。大勢の学生ボランティア集団が被災地に入ったが、その多くが福島や宮城、岩手県南に集中してしまい、北へ行くほど見当たらない。「学生さんに来てほしい」。宮古の人から声が寄せられた。

年度末の歓送迎会で知り合った小室

夕里先生から、中大生が被災地でボランティアをしていると聞かされた。ところが案の定、気仙沼での活動という。宮古での出来事を伝えたら、すぐに学内のボランティア・グループと学生課に声をかけてくれた。

岩手県沿岸広域振興局の宮古地域振興センター長で中大OBの花山智行さん

が、さらにバトンをつないだ。全国からのボランティアをまとめる地元の社協に申し入れ、いよいよ第一陣が東京からやってきたのは、8月のお盆前のことである。

私は東北夏祭りを取材で行脚している最中だった。東北を旅することも被災地支援になる。盛岡さんさ踊り、青森ねぶた祭り、さらには五所川原の立佞武多を観て、弘前ねぶたのなぬか日運行と、移動をしてはカメラのシャッターを押した。来年につなげたい。それが、どこも例年になく多くの観客で賑わっていた。取材の最終日、一路、中大ボランティア第一陣のいる宮古をめざした。

●子供と勉強する

石山英美子さん(文・3年)をリーダーに、赤木拓人さん(法・3年)、山田直輝さん(経・2年)、一ノ関裕彦さん(文・2年)、小松早紀さん(法・3年)、小川原薫さん(法・1年)、江川衛さん(法・1年)、そして金谷祥子さん(法・3年)の総勢8人が、食事もとらずに夜の8時半、引率の学生課工藤邦弘課長とともに笑顔で出迎えてくれた。

食事をしながら一人ひとりに感想を尋



宮古市中里団地の仮設住宅で支援活動をする中大生と(筆者、前列左から3人目)

ねた。「今回が初めてのボランティア」と語る学生もいた。ボランティア・サークルに所属する人もいた。「毎週、休みの日はボランティアをする」と聞いて、衝撃を受けた。私には高校3年と高校1年のふたりの息子がいる。さほど年齢は違わないのに、飛びぬけて大人にみえた。

翌朝、被災者が暮らす仮設住宅で活動の様子を覗かせてもらった。子供たちに勉強を教えたり遊び相手をする一方で、お年寄りと同じく会話する学生もいて、どれもが今、求められている支援のかたちと思った。

被災者のなかには、「忘れ去られるのではないかと不安を口にしている人もいる。だからこそ、いつまでも寄り添う心を持ち続けていきたい。多くのことを学生の皆さんに教えられた。

この中大ボランティアは、すでに9月に第二陣が赴き、そして11月に第三陣が宮古市をめざすという。さらなる輪が広がることを期待する。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。横浜商科大学・城西国際大学・東京成徳短期大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。